２月１日 メッセージ

聖書：マルコによる福音書 ４ ： １ － ９

「良い土地」

有名な「『種を蒔く人』のたとえ」です。キリスト者は謙虚な人が多いから、このたとえ話を聞くと「私は道端だから」「私は石だらけの土地だから」「私は茨の中だから」と謙遜します。個人的には皆さん良く聞いて良く行っておられるように見受けられるので、ぜひ「自分は良い土地だ」と言っていただきたいとは思っています。とはいえ、謙虚に生きることも大切なので無理のないように。ただ、これらの言葉の裏側には、「元々そのような土地なのだから」という諦めと予防線が見え隠れしているように思えます。

しかし、改めてイエスのたとえ話を読み返すと、そこに言及されているのは環境や状況であって、土壌のことは一言も触れられていません。そして、それぞれの場所は独立して存在するのではなく、一続きの場所として想定されていることがわかります。畑があり、その周囲には茨が生えている場所があり、耕されていない土地があり、人が行き交う道があります。用途が異なるだけで全ては同じ土壌の上に存在しています。その気になって開墾すれば、どこも同じ畑になるとも言えるでしょう。

大切なのは、「その気になるかどうか」なのです。イエス自身によるたとえ話の解説でも、神の言葉を聞いた人たちの姿勢や生活が問題視されている一方、その人自身の性質や本質には触れられません。イエスは「人は変わる」ということをよく知っておられるのです。

また、効率だけを考えれば、最初から「良い土地」にだけ蒔けばよいと思うこともあるでしょう。神の言葉を大切にしたいから、よくわかる、よく知っている人たちだけの間でやりとりすれば良いのではないか、と。確かに、神の言葉は大切です。パウロも「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです」(コリントの信徒への手紙一 2:7)と、神の思いがキリスト者にだけ開かれていることの意味を語っています。

しかしこれは「神を知らぬ者に神の言葉が開かれていない」ことを意味するものではありません。聞いてすぐに結果が出なくても、繰り返し語り続けることで耳が、心が開かれていくという場面を私たちは目にします。いや、自分自身がそのような存在だったと気づかされます。初めはわからなかったことが、繰り返し聞き続けることでわかるようになり、その言葉に応えていくことができるようになり、そして今度は自分が誰かに語りかける存在へと作り変えられてきたのです。

箴言は、「わが子よ／わたしの言葉を受け入れ、戒めを大切にして／知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら」(箴言 2:1-2)と繰り返し聞き続けることの大切さを語ります。すぐには応えることができなかったとしても、とにかく聞くことから始めるのです。その繰り返しの内に、根無し草のようだった自分に芯が通り、様々な誘惑に抗うことができるようになっていきます。

もちろん常に完璧と胸を張って言えるような生き方はできないかもしれません。三歩進んで二歩下がるような歩みかもしれません。それでも私たちは、「人は変わる」ことを信じて歩みたいのです。それは他者ばかりでなく、自分自身も含めて、「良い方向へと変わる」ことを期待する歩みです。今は状況が赦さず、道端のような状態かもしれません。耕す気力も無く、石ころだらけで荒れ地になっているかもしれません。茨に覆われていてもそれを取り払う力が無いかもしれません。

しかし、必ず時は備えられます。「種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をうたいながら帰ってくる」(詩編 126:5-6)と詩人が歌うように、豊かな刈り入れの時は必ず来ます。

「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった」(マルコによる福音書 4:8)。自分自身が、そして世界に生きる全ての人が豊かな実を結ぶ未来を夢見て、私たちは今日も生きるのです。